



ケダゴロ | 今後の予定

- ▼『ピコズカズコース』秋田公演 <「踊る。秋田」2022 特定提携公演>
2022年12月初旬予定 会場：秋田市内ホール
- ▼『ピコズカズコース』東京公演
2023年1月中旬予定 会場：東京芸術劇場<シアターイースト>

下島礼紗 | 今後の予定

- ▼「cont・act Contemporary Dance Festival 2022 | Grey Space」参加
2022年7月 会場：未定（シンガポール）
- ▼「Hong Kong Dance Exchange 2022」参加
2022年9月 会場：Hong Kong Cultural Centre（香港）
- ▼韓国国立現代舞踊団委託作品『黙れ、子宮』<「HOTPOT 東アジア・ダンスプラットフォーム」参加作品>
2022年9月 会場：Merry Hall Big Theater（韓国）
- ▼「Indonesian Dance Festival 2022」参加
2022年10月 会場：未定（インドネシア）

「세월」出演者 | 今後の予定

- ▼【小野涼平 出演】 Team Plain 『雲雀』
2022年8月3日～8月7日 会場：シアター風姿花伝
- ▼【鹿野祥平 出演】 佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ 2022
歌劇「ラ・ボエーム」(G. プッチーニ作曲 全4幕 イタリア語上演 新制作)
2022年7月15日～7月24日 会場：兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール
- ▼【田村真帆 出演】 喜劇のヒロイン タイトル未定
2022年7月15日～7月18日 会場：新宿眼科画廊
- ▼【沼田駿也】 劇団天の河神社 第5回公演「忘却の彼方で再会を」
2022年6月22日～6月26日 会場：中野 ザ・ポケット

宣伝美術：関川航平

記録撮影（映像）：遠藤正典 記録撮影（写真）：草本利枝

物販プラン・設営：丸目龍介

作中ナレーション：下島明、下島房子

制作：林慶一

制作補佐：韓ヨルム、末次杏子（ケダゴロ）、天満星南（ケダゴロ）、小泉れい子

協力：水口結、野崎詩乃、林ゆり、宮本蓮生、木村溪、加藤結衣、浅川奏瑛

寄付募集 | ご支援のお願い

2013年の旗揚げ以降、ケダゴロは絶えず自らの現状を挑発するべく、経済的な観念を打ち捨て「身の丈に合わせない」上演活動に鋭意取り組んで参りました。そのため、公演および団体運営はいつも自転車操業の綱渡りですが、楽しく明るく心身を擦り減らし、日々のクリエーションに励んでいます。こうした当団体の体当たりの活動に、共犯感覚で伴走いただけるご支援者を集めたいと、寄付の募集を始めることにしました。活動を続ければ続けるほどに生活は逼迫するばかりですが、むしろ一層に激しく、ケダゴロは満身創痍の体当たりを続けて参ります。

ご支援
窓口



ケダゴロ 「세월」

振付・構成・演出：下島礼紗

出演：

伊藤勇太、木頃あかね、小泉沙織、中澤亜紀、下島礼紗（以上、ケダゴロ）

内堀愛菜、小野涼平、鹿野祥平（劇団東京乾電池）、菊永沙紀、岸本茉夕、

白倉絵蓮、田村真帆、沼田駿也、水澤茜嶺

舞台監督：齋藤亮介

演出部：山本十三

照明プラン：金英秀 照明オペレート：野田彩乃

音響：許斐祐

2022年

5月26日（木）～5月29日（日）

5月26日（木）19:30～

5月27日（金）14:00～／19:30～

5月28日（土）14:00～／18:00～

5月29日（日）15:00～

会場： **KAAT 神奈川芸術劇場** <大スタジオ>

主催：ケダゴロ

提携：KAAT 神奈川芸術劇場

助成：公益財団法人 セゾン文化財団

芸術文化振興基金

公益財団法人 全国税理士共栄会文化財団

公益財団法人セゾン文化財団



本日はご来場いただきありがとうございます。私やケダゴロにとって、KAAT 神奈川芸術劇場で公演ができるということは、夢のような話でした。大きなチャンスに舞い上がる私の内に浮かんできた作品題材は「セウォル号事件」。

企画が立ち上がった当初、ある舞台装置を使用することが計画されていました。今、思い出すと言いやうのない激しい怒りが込み上げてきますが、それは「巨大な水槽」を使用するというものでした。色々な言い訳はあるにせよ、この事件のスペクタクルに無意識の高揚を感じていたことは否定できません。そんな演出を考えていたおぞましい自分への憎悪を震源地として、今日まで創作を続けてきました。しかし、この題材は“表現されること”をことごとく拒絶し、作品を創ることによってこの題材を選んだ責任を取ろうとする私を跳ね除け続けました。

それでも、こうして公演の日はやってきて、客席から視線を浴びることになります。観客の存在は、これを作品として成立させてしまうのか。表現してはならないものを表現に変えてしまうのか。

こんなに、表現の自由が怖いと思ったことはありませんでした。

あまりにも大きく立ち上がる隣国の事件を目の前に、そっとしておけば良かったと何度も何度も後ろを振り返りました。でも、そんなことが許されるはずもなく、それならば、ただ立ち尽くすのではなく、カリカリと目の前の壁を引っ掻き続けたいと思いました。例えばそれが、無意味な音を放つだけだったとしても。

今、この作品を乗せた劇場という船は、あまりにも不安定に出港の日を迎えます。この作品は、まだ非常に不恰好で、小さな片鱗を産んだ（そうであって欲しいと願います）ばかりです。お立ち会いいただいた皆様の反応があって初めて、創造が始まります。もしくは破壊か。つまり、今ここから如何様にも存在し得るのです。

しかし、残念ながら、今回は終演後にお話をさせていただくことができません。どうか、アンケートや SNS 等で皆様の思考をぶつけていただけないでしょうか。逃げも隠れもしません。真正面から受ける覚悟はできています。

この場にお立ち会いいただくお客様、向かう先の見えない表現から決して目を逸らすことなく向き合い続けてくれたキャスト・スタッフ、ケダゴロに大きなチャンスを与え、ご尽力くださった劇場の皆様、そして、創作にあたり様々な取材にご協力いただいた韓国関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

ケダゴロ主宰 下島礼紗

「理解」とは、他人の中に入って行ってその人の内面に触れ、魂を覗き見るのではなく、その人の外側に立つしかできないことを謙虚に認め、その違いを肌で感じていく過程だったのかもしれない。

キム・エラン（小説家）

キム・エラン「傾く春、私たちが見たもの」
『目のくらんだ者たちの国家』矢島暁子訳、新泉社、2018年

『세월』 についての 下島礼紗 のインタビュー動画

<https://youtu.be/HfRHNjPRJe4>

